

不登校のタイプに応じた関わり

1 はじめに

子どもが不登校になる原因は複雑です。様々な原因が重なり合い、複合的な状況として現れてきます。ですから、「このような事態には、このように対応するのが望ましい」と安易に判断することはできません。軽はずみな対応により、問題の解決を遅らせることもあります。

ここでは、「不登校の子どもへのタイプに応じた対応」について考えます。それは、子どもの不登校状態をより早く発見し、適切な対策を立て、指導するためです。また、子どもと関わる「チャンス」をとらえたり、「解決のための人間関係づくり」などに取り組めるようにするためです。

教師や保護者が、不登校の原因を同じように考えているのに、子どもへの対応に違いや差が見られる場合があります。この資料を参考にして、共通理解、共通行動による対応を生み出し、子どもの自立援助に役立ててください。

2 6つのタイプ

<表1>

番号	タイプ	タイプの特徴
1	学校生活に起因する型	学校生活や学習の場における出来事や体験などが原因となる場合 学業面での不満や劣等感をもち、そのために、学校が面白くないと感じ、 長期に欠席する場合
2	遊び・非行型	学校を休んで遊びまわったり、生活態度が乱れたりして、学校生活よりも 校外での遊びなどに関心をもち、学校に行かない場合
3	無気力型	学習意欲に乏しく、無気力な生活態度に終始している子どもが「何となく」 という気持ちで欠席を繰り返す場合
4	不安など情緒的混乱の型	学校に行かなくてはならないと考えて、行こうと努力するのだが、不安・ 緊張や情緒的混乱などのために行けなくて苦しむ場合
5	意図的な拒否の型	学校生活に意義が認められないというような独自の考えから、進路を変更 する、又は変更したいために登校を拒否する場合
6	複合型	※ 上記のものが様々な複合している場合

<表1>のタイプを分かりやすくするためには、一つ一つに具体的に事例を提示して説明するのが「タイプ」の活用には有効なのですが、ここでは（1タイプ）と（6タイプ）を中心に述べていきます。

A男の担任は「掃除競争」「漢字ドリル競争」「発言競争」「忘れ物競争」などと、子どもを励まし意欲をかきたてるために、「競争グラフ」を教室にはり出し、激励することを指導の中核に置いてきました。しばらくすると、競争グラフに個人差が出てきました。担任は、「成績の良い子と良くない子を適切に混ぜた班」を作り、班の中では、教え合いと協力を勧め、班と班では競争するようにグラフを作りました。

A男は、班の友達からしっかり教えられ、初めのうちは班の仲間に感謝していましたが、漢字ドリルなどで低い成績をとって他の班に負けると、「おまえのせいだ」などと心ない言葉で班員にいじめられるようになりました。

最初のうちは、A男の母親は熱心な担任の指導に感謝していましたが、A男が「おれ、馬鹿でドジだから学校へ行きたくない」と母親に話すことが度重なると、「担任の指導の仕方が悪いから、友達までA男をいじめるのだ」と訴え、A男を学校へ出すことを拒否し、「すべての原因は学校にある」と主張しました。

(1) 事例Ⅰの中の教師

A男の担任は、子どもの頃から両親に「人生は競争だ。競争に勝ってこそ大物だ」と教えられてきました。そのため、教師になって以来、子どもの学習意欲や生活意欲をかき立てる指導法として、「競争」を中心に据えてきました。競争に負ける子どもには、励ますために教育相談を続け、家庭訪問をして支援するほどの熱心さでした。

校長をはじめ、周囲の教師たちも、彼を”熱心な教師”として評価していました。にもかかわらず、A男とA男の母親から抗議を受けてしまったのです。

(2) 指導の経過

- a 他の教師に学年会で相談すると、「競争に行き過ぎのところがある」という指摘を受け、班競争をとりやめ、班内での教え合い、助け合いだけにしました。
- b 次に、班の班長を漢字の時はB男、掃除の時はC子というように、得意なところでリーダーになり、仲間同士で教え合い、協力したらどうかと問いかけました。
- c 「面倒くさい」などの文句が出ましたが、A男を体育のリーダーとして位置づけ、一人一人を生かす仕組みを作りました。
- d 担任は家庭訪問し、自分の指導法の行き過ぎを詫びました。班競争をやめたことや、班員がいじめたことを反省していることも伝えました。担任と母親、担任とA男、A男と友達の間が打ち解け合うような話し合いを続けることにしました。
- e その結果、両親とも担任の誠意ある対応に、気持ちを少しずつ和らげ、感謝を表すようになりました。そして、A男も「先生、ぼくの出番を作ってくれたの」と明るく話すようになりました。

(3) 事例の特色

この事例Ⅰの特色は、信念があり熱心で、しかも子どもの面倒をよく見る教師自体の指導性が、一部の子どもを押しつぶしてしまうところにあります。一般的には、教師の誠意が子どもの心に重圧をかけるとは思えません。しかし、指導に行き過ぎた面があると、現実には不登校が起きてしまいます。

この点から、教師の指導姿勢として、子ども一人一人の様子を見ながら、自分の指導の住り方を見つめ、常に指導の方法を改善していくことが大切だということが分かります。自分の指導を振り返る際、不登校になった子ども一人一人のための解決だけでなく、学級全体の雰囲気や人間観を変えていくような努力をすることが必要です。

(4) 指導上の留意点

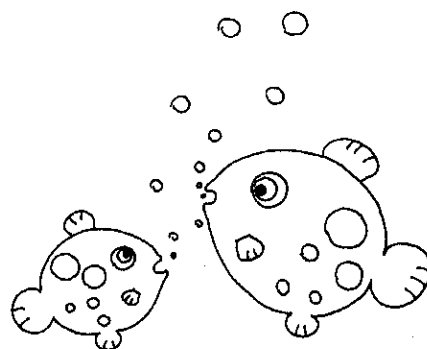
事例Ⅰは、教師の指導法とそれが子どもたちに与える影響に主因がありましたが、「学校生活に起因する事例」には、他に次のようなものがあります。

- | | | |
|-----------|-------------------|----------|
| ① 友人関係が主因 | ② 学業不振が主因 | ③ 部活動が主因 |
| ④ 班活動が主因 | ⑤ 保護者の歯止めのない批判が主因 | |

事例の主たる原因が何であるのか、どのような人間関係（教師、友だち、保護者）になっているか、まず事実を明らかにします。

教師の指導に原因がある場合は、教師が自己反省しなければなりません。時間をかけて、誠意をもって段階的に解決していくことが大切です。保護者に対しては、学校の指導方針や指導の改善点などについて理解が得られるよう粘り強く対応する必要があります。

問題解決は、教師自身がいかに意識改革するかにかかってきます。それは同時に、校長を中心とする学校経営の改善でもあります。



4 事例Ⅱ 複合の事例

中学校2年B子

B子は何でもできて、小学校の頃から児童会の役員に推されていました。中学校では1年生1学期から学級委員長を務めるほどの生徒でした。中でも、友達の世話ができ、真面目に努力する態度は、全校教師の期待を集めていました。

2年生2学期になると、生徒会の体育祭実行委員になり、全校を動かす立場になりました。しかし、肝心の自分の学級が動きません。一人一人に手紙を書いて体育祭に協力するように頼みましたが、「体育祭なんて、勝っても負けても同じさ」「お前、馬鹿か。体育祭なんて遊びだよ。自分の勉強の方が大切さ。」などと、みんなの前でなじられました。

B子が、中学時代に生徒会長だった兄に相談すると、「おまえの力がないからだ」と笑われました。母親に相談すると「体育祭が終われば楽になるのだから頑張れなさい」と励まされました。いろいろな先生に相談すると「君が頼りだから頑張れ」と激励されました。

B子は体も心も疲れていく自分を感じました。突然、腹が立ったり、すごく悲しくなったりしました。成績はどんどん下がっていきました。ノートも書かなくなり、時には授業中に居眠りしたり、ぼやーっと窓の外を眺めていたりする日々が続きました。全く無気力になってしまったのです。

やがて、B子は家から一歩も出ないようになりました。担任の家庭訪問も受け入れず、家族の誰とも口をきかなくなりました。自分の部屋に閉じこもって「私はダメな人間だ。何もやりたいことがない。」とつぶやくばかりでした。

(1) 指導の経過

- a 体育祭を境に無気力、不登校になった原因を、B子が在学中に言った言葉を手がかりにつかみました。家庭での様子と重ね合わせて、指導の方法を考えました。
- b 次のことを、B子と関わり合った人々の共通理解としました。そのために、学校で指導したり、家族との懇談を継続的にもちました
- ・ B子の誠実な努力が友達から反感を持たれたこと
 - ・ 教師や家庭からは過大な期待をかけられ、自信やプライドを失い、無気力になってきたこと
- c 担任は学級で「私達の体育祭に取り組む態度や考え方がB子さんを苦しめてしまった」と語り、温かく迎え入れる学級づくりを目指して、何度も話し合いをしました。
- d 担任は家庭訪問をしました。しかし、「私に頼ってばかりいて、先生は助けてくれなかったじゃないの」という教師不信のB子は、担任に会うことを拒否しました。友達からの手紙や電話が継続すると、少しずつ心を開くようになりました。
- e 父親はB子の不登校を家の恥だと責め、兄は「B子の能力がないからだ」と馬鹿にしていました。担任との話し合いを通して「B子が背負っている重圧を少しでも軽くしてあげること」の大切さを理解し始めました。
- f B子を取り囲む人々は、B子の良さを最大限に認める方法で支援するようになりました。B子の笑顔が少しずつ戻ってきました。
- g 担任がB子の笑顔に接したとき、さり気なく「今度のことは挫折でなく成長の一つ」であることを語りました。

(2) 指導上の留意点

無気力になる子どもには、他にも様々な原因があります。

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| ① 学力不振による自己嫌悪やあきらめが主因 | ② 家庭崩壊による人間不信が主因 |
| ③ 強い外部からの叱責や暴力が主因 | ④ 何もできないとあきらめたことが主因 |

指導をしていく上で、その子が無気力になった原因をきちんと踏まえておくことが必要です。

事例IIの場合、周囲の人々からの期待に応えられない自分に、自信とプライドを失い、心に深い傷を負ったことに着目することが必要です。ですから、挫折に目を向けるよりも、「B子の良さや優れたところ」に着目し、B子を囲む人々が良さなどを共通理解し、温かく見つめ直すことを優先します。

B子と直接に会話したり、ふれ合うことを急いではいけません。B子のペースを大切にしながら関わります。B子のペースを大切にしながら良さを見付け出せれば、B子を改めて認める機会になります。

「自信を失い、プライドが傷つき、挫折した」ことも、長い人生の中で考えれば成長です。深く傷ついたB子を温かく迎え入れながら、B子自身が自分を見つめ、自分自身の成長に気付くことができるようにしていきましょう。